

# 人物書誌大系36

# 寺田寅彦

随筆の高手として  
知られる  
近代の物理学者



大森 一彦 編  
A5・360頁 定価(本体16,000円+税)  
ISBN978-4-8169-1939-8 2005年9月刊行

## 寺田寅彦 (1878-1935)

物理学者で漱石の門下生でもある随筆家。金平糖の角の出来方、猫の毛並み、電車の混雑など身近な現象を物理学者の目で観察し、随筆に著した。物理学的根拠に裏付けられたユニークな仮説を提唱した数多くの随筆は、今なお多くの人々に愛読されている。

■随筆家としても人気の高い物理学者、寺田寅彦の本格的書誌。個人に関する年譜、著作、参考文献を集大成した人物書誌大系シリーズの第36巻です。

■寺田寅彦の著作と、1904年から2005年前半までに発表された寺田寅彦に関する文献(追悼記事、回想文、評論、研究など)1,793件を収録しました。

■各文献には要旨または解説を付記しているので、人物と作品に関する評価の変遷がわかります。また、全集に未収録の作品や書簡の発見報告も収録しています。

「執筆者名索引」と文献形式・テーマにより体系化した索引語から引ける「分類索引」付き。

【構成】 参考文献目録(発行年月日順)  
附録 A.略年譜  
B.著書目録(刊行年月順)  
C.主要参考文献再録  
D.全集未収録文献再録  
執筆者名索引/分類索引

### 【編者プロフィール】

大森 一彦(おおもり・かずひこ)

1937年、秋田市に生まれる

1965年~2000年、東北工業大学附属図書館 司書

1988年~2002年、富士大学 司書講習 講師(図書館資料論)

著作『科学技術史関係年次文献目録・1972年~1994年』

(共編、日本科学史学会「科学史研究」1973~1996連載)

『中谷宇吉郎参考文献目録』(中谷宇吉郎雪の科学館、2000)

『大森一彦 書誌論集』(文献探索研究会「文献探索・2004」2004)

2019.8

お問い合わせは… 日外アソシエーツ 営業局

TEL.03-3763-5241(代) FAX.03-3764-0845

〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16 <http://www.nichigai.co.jp/>

■貴店名	注文書	人物書誌大系36 寺田寅彦	冊
		定価(本体16,000円+税) ISBN978-4-8169-1939-8	
		■お名前	

## 参考文献目録

1923

23125. 小宮豊隆:『冬彦集』後語.吉村冬彦著.冬彦集.岩波書店.1923.1.25.p.499~501. → 42125a-2,49125-2,52115-2.  
 \*〈科学と芸術の総合〉という寅彦評価の型を作ったのは初めての文章。「『冬彦集』の作者の心の中に科学者が住んでゐるといふ事は、『冬彦集』に現はれた,作者の精到な観察と透明な識得と細緻に然も律動的に展開する〈論理〉と文からでも,誰にでも恐らく直ぐ認め得られる事だらうと思ふ,同時に,……高い寂しい然し濃やかで暖かなヒューマンな心が,慎ましやかではあるが鮮やかに流れてゐる事を感じ得る事によって,比較的容易く此作者の心の中の芸術家をも捕まへる事が出来るに違ひない」.
23205. 小宮豊隆:『藪柑子集』の後に.吉村冬彦著.藪柑子集.岩波書店.1923.2.5.p.281~284. →28615,42125a-1,49125-1,52115-1.  
 \*その作風を解説して,「…此処には,主として,憂鬱な,然し決して其中に溺れて了ふ事のない,其意味で理性をとりはずす所のない,其癖底には堰きとめられた涙が一杯にたまって見える,絹漉しの様な肌理の,さうして全体としては燻しのかつた,美しい〈叙情詩〉がある」とのべ,また文学史上の位置を「〈春秋〉の筆法を用ふれば,集中に収められた〈団栗〉や〈龍舌蘭〉は,三重吉の〈千鳥〉の父であり,漱石先生の〈草枕〉の祖父である」とのべる.
23401. [無署名]:新刊紹介—吉村冬彦著『冬彦集』・吉村冬彦著『藪柑子集』.ホトギス.Vol. 26.No.7.1923.4.1.p.66.  
 \*『冬彦集』—「吉村冬彦とは寺田寅彦氏の新しい名なり.大正九年春以後諸種の新聞雑誌に現はれたる小品感想の類を収む.……著者自らをして云はしむれば(いづれも病間病余の随筆)の如きものなれど,科学者たる著者はよく観て而してよく考察し,芸術家たる著者はよく感じてし而してよく描くと云ふべきか,まことにこの著者の眼孔の照すところ,一塵の微と雖も問題を帯び来り,この著者の描くところ,巷頭一瑣事の如きも歴々として紙表に生動するの感あり.固より科学者の乾燥なる叙説と選を異にし,同時に又放漫なる文学者の感想の類にあらず.著者の如き科学者と芸術家を全く一身に兼ね具へたる人を俟たずんば,他に求むべからざるものたるや論無し.世上多くの随筆雑文の一時的興味に終始し,久しからずしてその価値を失ふものに比すれば,その深みと気品とに於て日を同じうして語るべからざるなり.…」  
 『藪柑子集』—「古き(ホトギス)の写生文を記憶するものは,中に就き寺田寅彦氏の名を数ふるを忘れざるべし.氏が多く藪柑子なる名の下に筆を執りたる当年の作品は,情趣豊かなる内容と,簡潔にして温かなる筆致と相俟って,今猶深き印象をとむ.著者はこれらの作を発表せるのち,約十年間殆どこの種の文に筆を絶ち,最近『冬彦集』所載の如き文章に於て新たな面目を示し来る.『冬彦集』出版を機としてその前期の諸作を網羅せるこの集の出づる,吾人にとって特に大なる喜びなり…」.
23501. 安倍能成:『続小品集』と『冬彦集』と.思想.No.20.1923.5.1.p.136~147. →24825,51y30.